　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２０１７．７．１　大草

読書メモ

67．小牧治　「和辻哲郎」　清水書院（1986.12）

68.　中村圭志「教養としての宗教入門」　中公新書（2014.11）

＜　小牧治「和辻哲郎」から＞

この本は、和辻哲郎の来歴と思想を分かり易く解説した本である。（しかし難解である）

・和辻は、「日本精神史研究」を進めていくうちに、仏教思想がいかに根深く日本人の精神生活の根柢となっているかを見出し、なんとしても仏教思想が必要となってきたという。

・また、シナ仏教の理解には、インド仏教の理解なしには不可能であり、結局原始仏教以来の史的展開を理解することによってのみ、シナ日本における仏教思想の特殊性が理解せられうるものであることを悟るに至ったという。

・「原始仏教の実践哲学」第１章根本的立場：原始仏教の革新性は、バラモン教等の我を立てる思想（計我）に対して、我（超感覚的、実体的、超越的主観）を捨てるところ（無我）にあった。計我は、素朴実在論的、自然的な立場であり一切の煩悩の根であり、無我は、すべての我を抜き去る立場であり一切の煩悩と関係がなくなるという。

　・和辻は、無我の立場を本質直観の立場といった。本質直観の立場では、自然的立場を遮断し、現実の実相を観て真実の認識をする。即ち解脱である。色における繋縛や楽欲が滅し、色から解脱することである。法に基づく一切の存在が無常、苦、無我であるという真理は、同時にこの無常なる存在の止揚をも意味する。自然的立場のこの根本的排除が涅槃である。涅槃の語義は滅である。真実の「道」は自然的立場の排除であり、滅に向かって進む道である。法を観ずるとは、無明すなわち自然的立場そのものを滅することであり、無明を滅することはそれに条件づけられたあらゆる法を滅することである。だから、法を観ることが直ちに法を滅することになる。原始仏教の実践哲学なるゆえんはここにある。（後年の和辻哲学が、実践哲学、すなわち「倫理学」となっていったところにも、この「原始仏教の実践哲学」の影を見ることができるという）

　「人間の学としての倫理学」（和辻哲郎著）：

・西洋近代の思想は、個人や自我が独立して存在するものと考え、その意識から出発して人間存在や社会や人間関係を考えた。和辻は、人間は独立した個人ではなく、間柄にある相手によって既に規定されており、この間柄を前提に個々の行為をする存在であると考えた。人間の個々の行為は、個人的であるとともに社会的である。個人と社会は、人間そのものの二つの面である。個人は間柄（人倫）のなかにおかれながらその中に埋没することがない。間柄と間柄の全体を否定することにより個人としての自己を自覚するとともに、自己を没して（否定の否定）、自己の置かれた間柄の全体をよりよく創造しようとするのである。こういう否定の運動が倫理の根本原理なのである。

・倫理学とは、人間関係、従って人間の共同態の根柢たる秩序・道理を明らかにする学問である。人間という言葉の意味は、世の中・世間・社会を表し、同時にそのなかの個人をも表する。即ち、人間とは、世の中であり、世の中の人（個人）である。人間存在は、人間の世間的な側面と個人的な側面の統一である。人間存在の根柢には、かかる行為的連関の動的統一があり、それが倫理であり、秩序であり道なのである。

・存在とは、間柄としての主体の自己把持、即ち人間が己自身を有つことである。存が自覚的に有つことであり、在が社会的な場所にあることであるという点を結合すれば、存在とは「自覚的に世の中にあること」である。また、世の中にあるためには実践的交渉によってのみ可能であるため、存在とは「人間の行為的連関」であると云わねばならない。

・個人も全体も真相においては「空」であり、その空が絶対的全体性なのである。否定の否定は絶対的全体性なのである。即ち、空が空ずるが故に、否定の運動として人間存在が展開する。否定の否定は絶対的全体性の自己還帰的な実現運動であり、それがまさに人倫である。だから、人倫の根本原理は、個人（全体の否定）を通じて更にその全体性が実現されること（即ち否定の否定）に他ならない。これが、絶対的全体性の自己実現の運動なのである。かく見れば、人倫の根本原理が二つの契機を蔵することは明らかである。１つは、全体性に対する他者としての個人の確立である（ここに自覚の第一歩がある。個人の自覚がなければ人倫はない）。もう一つは、全体の中への個人の棄却である。超個人的意思あるいは全体意思の強要と呼ばれたものはこれである。この棄却のないところも人倫はない。

・人間の全体性を否定することにより個人になるとき、そこにその個人を否定して全体性を実現する道が開かれる。⇒全体主義思想への道を開いたといえよう。

・和辻は「人間の学としての倫理学」で、倫理学の意義や構想を記述した後、アリストテレスのPolitike、カントのAnthoropologie、コーヘンの人間の概念の学、ヘーゲルの人倫の学、フォイエルバッハの人間学、マルクスの人間存在などが検討し、それらと自説が背反しないことを論証している。

・和辻は、倫理学の方法として4つの規定をしている。

①問うことと問われているものとが一つである。（倫理学とは、倫理学とは何かと問うことであり、個人の問であると同時に共同の問である。人間の問であり人間の存在に関することであり、人間関係ないし間柄において行われる。問いが導いていくのは問い問われる人間関係であり、実践的行為的な連関であり、また倫理である。）

②問われているのは、実践的主体としての人間である。問われている主体的人間が倫理の方法を決定する。

③倫理学は、学であり理論だ。学は倫理とは何々であると翻訳しなければならない。

④倫理学の学的性格は人間存在の表現の問題にあり既にその了解を含んでいる。このような表現と了解とを通路としてのみ倫理学は主体的現実を把捉できる。

以上の通り、倫理学の方法を４つの点から規定した。倫理学は人間の問として問う人間自身に帰る。この4つの点から帰結される方法とは、表現を通じて主体的なものを理解するという解釈学的方法である。

・和辻は、人間存在の根本構造と空間的・時間的構造について考察する。

・人間におけるすべての全体的なるものの究極の真相が空であり、したがって全体的なるものはそれ自身においては存しない。ただ個別的なるものの制限、否定としてのみ自己を現わすのである。

・個人と全体者とは、いずれもそれ自身において存在せず、ただ他者との連関においてのみ存在するのである。他者との連関において存在するということは、他者を否定すると共に他者から否定されることにおいて存在する。人間の間柄的存在とは、このような相互否定において、個人と社会が成り立っていると考えた。和辻は、絶対的全体性、絶対的否定性、即ち「空」の思想を展開する。個人も社会も突き詰めれば、「空」に他ならないという。

・和辻は、人間共同体の根柢、つまり人間存在の理法が倫理として規定されたとし、この人間存在の根本理法は「根本倫理」とであるとした。そこで、倫理学の根本原理は、「絶対的否定性が否定を通じて自己に還る運動」として規定した。

・和辻は。社会からも個人からもヨシとされることが「善」であるという。最高の価値は絶対的全体性であり、それへ上昇しようとすることが「善」であるという。

・和辻は、空間・時間が根源的にあるのでなく、人間が空間・時間の中に存在するのではなく、逆に空間・時間が人間存在から出てくると考えた。

＜大草コメント＞

和辻哲郎の著作は難解なため、解説本により、和辻の考える「仏教と日本人の倫理意識との関係」を知ろうとして、この本を読んだ。しかし、そのことに触れた個所はほとんどなく、和辻の思想を解説したものであった。その思想は西田幾多郎や仏教の影響を受けたものであり、空の概念など仏教の影響も。なお、和辻は、ゆるがぬ天皇制支持論者であり、戦前は戦争擁護論者であった。また、昭和２５年～３６年まで日本倫理学会の会長を初代から６期歴任した。

以上